

天沼小だより

文責

校長 大里 忠弘



1学期終業式は校長室からのライブ配信

終業式は、子どもたちがそれぞれの教室で校長室からのライブ配信を視聴する形で行いました。

夏休みを安全に過ごすための注意点について、警察官に講話をしていただきました。また、校長は次のように子どもたちに向けて話をしました。

明日から夏休みです。夏休みと言えば、海・山・川。海水浴、キャンプ、バーベキュー、虫取り、・・・自然の中での楽しいことがたくさん思い浮かびます。

もちろん、宿題もありますが、今年の夏休みは、自然との触れ合いを大切にしてほしいです。

人間が地上に現れるよりも、ずっとずっと昔から自然はありました。昔海であったところが陸になり、その陸地も少しずつ動いて、今の地球の形になりました。火山の噴火があったり、冷たい氷河の時代があったりしました。(と、私は学校で学び、そうだと思っています。)

地球上に暮らす生きものの様子も、長い時間をかけて変わってきたようです。地球上に最後に現れた人間は、言葉を持ち、世界中の人間が互いに話し合い、これまでになかったものを作りだし、便利で豊かな世の中をつくってきました。人間には知恵があり、知性があるからそれができるのです。

では、人間以外の自然には、知恵や知性は無いのでしょうか。

人間が山にダムを造り、森を切って道路を作っても、自然は黙っています。人間が動物の肉や、植物の実を食べても、文句を言いません。自然は、人間にされるがまま。

人間の生活のために、川が汚れ、海が汚れ、空が汚れています。山に海に川に、街の中にも、人間が出したゴミがあふれています。それでも、自然は文句を言いません。山は口を利きません。海も話をしません。私たちが食べている動物や植物も、何も話しません。

彼らには知恵がないのでしょうか。

みなさんは、どう思いますか。

私は、自然にも知性があると信じています。自然と、私たちが互いに理解し合うための共通の言葉がないからといって、自然には知性がないということにはなりません。自然の考えていることが分からないでいるのは、私たち人間の方に問題があるからだと思います。

私たち人間は、どれだけ、山や海、川、動物たちや野山の植物に支えられているかをしっかりと理解しなければなりません。今、あなたが鼻から吸っている空気は、植物の葉っぱでつくられた酸素です。山に木がなくなってしまうたら、私たちは息もできなくなるのです。私たちの命は、山の木に支えられているのです。

明日からの夏休み。海や山に行かなくても、家の周りにある花や、草、空を飛んでいる鳥や家で飼っているペット。空に浮く白い雲。何でもいいです。これは自然のものだよと思うものが、どんなことを考えているだろう。何か言おうとしているのかなと、自然の声に耳を傾けるチャレンジを試してみてください。何か伝わってきたなら、2学期のはじめに、ぜひ、教えてください。

ということで、各クラスで出る宿題に加えて、校長先生からの宿題とお願いが二つです。

まず、宿題は、夏休み、自然とお話をする。自然からの声が聞こえなくても、自然に向かって、こんなお話をしてみましてもいいです。

お願いの一つ目、絶対に交通事故に遭わないでください。交通事故に遭わないために、皆さん自分の頭でしっかりと考えながら街に出てください。

お願いの二つ目、絶対に犯罪に巻き込まれないでください。お金を払わずにお店のものを持ち出す。万引きですね。これは犯罪です。人のものをいたずらで傷つける。これは、器物損壊罪という犯罪です。人のものを黙って持って行ってしまおう。これも、占有離脱物横領という犯罪です。皆さんは、立派な脳を持っていますので、しても良いこと、してはいけないことが何なのか分かるはず。犯罪は絶対しないでください。

残念なことに、いけないことを考える、悪い大人もいます。そんな大人の引き起こす事件には絶対に巻き込まれないように、気をつけましょう。

では、2学期、元気な姿でまたお会いしましょう。

夏休み突入

子どもたち大喜びの夏休みが始まりました。子どもたちの世話をする保護者の皆さんにとっては、「始まってしまった」と言いたいところでしょう。

先日、素敵なお本に出会いました。この夏休み、ますます忙しくなるのに、読書を勧められてもな、とお感じのところでしょうか、是非、時間を作って、お読みになることをお勧めします。

書名は、『かんがえる子ども』福音館書店

著者は、安野光雅さん。昨年12月24日に肝硬変でお亡くなりになりました。94歳でした。

『ふしぎなえ』『さかさま』『はじめてであう すうがくの絵本』など、驚きに満ちた絵本を多数出版された巨匠です。紹介するのは、絵本ではなくエッセイです。子どもにかかわるすべての人にむけたエッセイということで、私は教師として読みましたが、子育て真っ最中の保護者の皆様にも、とても参考になる内容です。「まだ、間に合う」と言いたいところです。

まえがき引用 『かんがえる子ども』安野光雅(福音館書店)から

ぱらっと見て終わってしまう、とか、わかりやすい、という絵本はたくさんあります。絵本だけでなく、日常のことでも、「わかりやすい」「すぐに役立つ」ということが大切と思われていて、「自分で考える」ということが少なくなっているように感じています。

「考える」ということは、「数学の問題を考える」場合のように、出された問題の答えを考えることだけではありません。「考える」ということは、普通に暮らすことです。「普通に暮らすこと」＝「考えること」といわれても、かえってわからなくなるかもしれませんが、たとえば、「晩ご飯のことを考える」だけでもたいしたことですし、「子どもを育てることを考える」としたら大事業です。

ハイハイをするような赤ちゃんでも、部屋の中に段差があって、手から降りることができないとわかると、くるりと後ろ向きになり、足から降りたりします。これも、赤ちゃんが自分で考えてそうしているのです。

わたしは最近、スイスへ行く用事ができたのですが、手違いのため、行くことができなくなって、しかたなくボスニア・ヘルツェゴビナ、コソボ、マケドニアの三国を回るバスツアーに参加してきました。せっかく時間を空けておいたのに、予定を変えることになってしまい、もうどこでもいいから、いままで行ったことのない所へ行ければいい、と思うようになっていました。6日間の旅でした。

それまでのわたしの旅は、自分で車を運転して、(でたらめではあっても)一応の目安を立てた旅でした。それが、こんどは何も考えないまま旅に出ていったのです。宿のことも、食事のことも、見るものも(マザー・テレサがマケドニア出身であることも、旅先で初めて知りました)、荷物のことも(一緒に行った仲間が運んでくれました)一切考えず、格別自分で計画しない旅でした。

つまり、その一週間というものは、何も考えないで、体を人にあずけたようなものでした。それなのに疲れて、ツアーの人はみんな名所をめぐるのに、わたしだけバスの中に残ってうたた寝をしていたくらいです。

バスの中から見る世界も悪くありませんでした。ははあ、この国にも大工さんがいるのか、あのふたりは何を話しているのか、借金のことか、それとも縁談のことかもしれないなどと、想像をたくましくしました。

それで、じゅうぶんだのしい旅でした。

建築家の安藤忠雄さんも、哲学者のデカルトも、本を読めるだけ読んで、旅に出ます。ここから先は本の中ではなく、実際の風景や、人々の生活の中に学ぶものがあると考えたからです。

わたしの場合、今回の旅は、きちんとした考えも持ったものではなく、考えない旅でしたから、あまり立派なことは言えませませんが、人は考えないようであり、やはり生きていけば、何かを考えているのです。振りかえってみると、たとえば哲学者でなくても、わたしたちは毎日考えて暮らしているのです。

この本では、テレビやインターネットなどを見ているうちに、料理のしかたから作法のありようまで、「考え」をだれかに託してしまっている、このことを「考えなくなっている」といっています。

この本は「すぐに役立つ」本でも、「○○ができるようになる」ための本でもありません。

「自分で考える」ということはとても大切なことです。本を読みながら、自分自身で考えてもらいたいと思っています。

